

水野祐著作集6

日本史概説

早稲田大学出版部

水野祐著作集6

日本史概説

早稲田大学出版部

水野祐（みずの・ゆう）

大正7年 東京に生れる。

昭和16年 早稲田大学文学部史学科国史専攻卒業。

昭和36年 早稲田大学文学部教授職任。日本上代史、
日本文化史担当。

昭和47年 早稲田大学より『出雲国風土記論攷』によ
り文学博士の学位を受ける。

平成元年 早稲田大学名誉教授となる。

平成3年 勲三等瑞宝賞を受ける。

主要著書 『日本民族の源流』雄山閣出版、昭和35年
『出雲国風土記論攷』上下、白川書院、昭和
40年

『古代社会と浦島伝説』上下、雄山閣出版、
昭和50年

『日本古代史研究法』雄山閣出版、昭和58年

『評釈魏志倭人伝』雄山閣出版、昭和62年

『改訂増補 勾玉』学生社、平成4年

日本史概説

水野祐著作集 6

1996年7月31日 初版第1刷発行

検印省略

著者 水野祐

発行者 岡沢憲美

発行所 早稲田大学出版部

〒169 東京都新宿区戸塚町1-103

振替 00130-3-1123 ☎ 03-3203-1551

印刷所 三秀舎

製本所 牧製本

©1996 水野祐

Printed in Japan

ISBN 4-657-96312-0



昭和22年5月13日，多摩川原にて。

序

本書は著作集第六冊として、予告の構成を変更して、『日本史概説』として上梓することにした。この刊行の経緯については、巻末の跋に詳述してあるので参照していただきたい。

この『日本史概説』は、昭和二十二年六月に開校された、旧専門学校令による、私立立川専門学校（現東京都立立川短期大学の前身）の経済学科・英文学科の学生に課せられた、教養科目の歴史学の授業の講義ノートとして作成された、大判の大学ノート約九十枚百八十七頁にわたって記されたものである。

そのノートは昭和二十一年九月初めより、昭和二十二年二月二日にいたる間に執筆されたものである。私自身の刊行した日本史概説の書物としては、『世紀別表解式日本史の整理』（昭和三十二年・稲門堂）・『コンパクト日本史整理』（昭和四十三年・教研出版）の二冊があるが、これはともに大学受験のための日本史の参考書であって、一般的な概説書としては、『講談社現代新書』の一冊として刊行された『日本人の歴史』（昭和五十三年・講談社）があるだけである。これらの三冊の書を纏める際に、この『日本史概説』のノートを参酌しながら記述を進めたのであったが、その後引越などで手元になくなっていった。それが一昨年、自宅の書庫の一隅から、他の古書籍などと混じって箱詰にされていたのが発見された。そこで再び通読を試みたが、現代の進歩した日本史と対比さ

せてみて誤っていることが明らかで、特に改訂しなければならないという所は見当らなかった。勿論四十数年前の執筆であるから、その後の新発見によって知られた新事実は記されていないが、日本史を書く歴史の大局に關する私見には今でも大過のないことが再確認できた。

この拙い『日本史概説』は、半世紀にわたる私の一介の歴史家としての生涯を通じて、最高の記念碑である。終戦後一年、私が辛うじて戦地から復員して半年たった時点で、突如として、それまで意図したこともない、日本史の通史を執筆するという重荷が課されたのである。蔵書も、家財も、一切空爆によって焼失してしまい、戸惑いの中に呻吟していた時に、私をして歴史家として困苦を断ち切つて研究一筋の道を歩ませる契機となつたのが、実にこのノートの作成であつた。このノートはいつも当時の私の苦悩の生活、しかしそれは希望と楽しみを奇妙に混じえた苦悩であつたが、そうした私の往時の姿が、このノートの行間から読み返す度毎に滲み出てくるのを覚えるのである。いつもその頃のことを思い起して、感無量の境地に追いこまれるのである。

私は意を決して、漸く手にし得たこのノートを活字化して永遠に遺したいと考え、出版部の同意を得て刊行するに至つたのである。この概説は、一年間という限定された時間内での講義のために用意されたものである。至れり尽せりの、細部にわたつて史実を網羅する教科書的な概説ではない。私には無味乾燥な当り障りのない教科書の概説を執筆するような能力もないし、そのような意図も持ち合せていなかった。敗戦後の憂愁の間に処した一歴史家としての抵抗の精神。これがこの概説を纏めさせた原動力であつたと思う。不穏当な部分を墨で塗りつぶして、残つた部分をつなぎ合せた教科書で、辛うじて日本史の授業が行なわれていた時なのである。そんなことでは到底正しい日本史の教育など出来るものではないと義憤を痛感して、私は私なりの史観によって日本史を

再編成することこそ戦後の日本史家の最大の義務と確信して、このノートに精魂傾けて取り組んだのであった。本書をなすに際し、ノートの誤字を訂正したこと以外は全く手を加えず、ノートの全貌をそのまま刊行することにした。その時点での私の意図を理解して読んでいただければ幸甚である。

平成七年八月十日

水野 祐記

日本史概説

目次

序	1
第一章 序論	1
第一節 緒言	1
第二節 歴史学の定義	9
第三節 日本史の時代区分	15
第二章 先史時代	20
第一節 旧石器時代の日本	20
第二節 中石器時代の日本	24
第三節 新石器時代の日本——縄紋時代——	27
第三章 原史時代	27
第一節 日本民族の形成	27
第二節 彌生土器とその文化	29
第三節 日本神話	29
第四節 原史時代の社会	30

第五節	古墳時代の成立	一五九
第四章	古墳時代中期と倭王の時代	一五二
第一節	難波遷都と仁徳天皇	一五二
第二節	雄略天皇とその前後	一五七
第五章	歴史時代(I)	一七二
	——律令社会の時代——	
第一節	飛鳥時代	一七二
第二節	大化の改新	一八〇
第三節	齊明朝と白村江の敗戦	一八六
第四節	近江遷都と天智朝	一九六
第五節	壬申の乱と皇親政治	二一一
第六節	藤原京と持統女帝	二一五
第七節	寧業時代	二二七
第八節	平安時代	二三五
第六章	歴史時代(II)	二四四
	——荘園封建社会——	

第一節 院政時代	三三四
第二節 鎌倉時代	三三九
第三節 吉野時代	三四四
第四節 室町時代	三五三
第七章 歷史時代Ⅲ	三六一
——幕藩封建社会——	
第一節 安土桃山時代	三六一
第二節 江戸時代	三六八
第八章 歷史時代Ⅳ	三九三
——資本主義社会——	
第一節 江戸時代後期——町人の抬頭	三九三
第二節 東京時代中期——明治時代	三九八
第三節 東京時代後期——大正・昭和時代	四〇三
参考文献目錄	四一五
跋	四一九

第一章 序論

第一節 緒言

(一) はじめに——歴史とは何か

私はこれからごく簡明に日本民族の歴史的進化のあとを追って、縦の年代史的に、時代の順にしたがつて通史を記述していく。しかしこれは極めて重大な課題であつて、これを完璧な形で纏めるということは莫大な時間を要することであるから、ここではごくその要点だけをできる限り簡潔に述べていくことを許されたい。

さて本論に入るに先立つて、私はまず歴史の学問とは何かという点から触れていきたい。「歴史 History とは」という問に対して、歴史家は、古典ギリシア語の *Historia* の語義から説きおこしている。このギリシア語の原義が「探究して得た知識」という意味であることから「古い時代の物語」という意味になり、それが今日一般に言われる歴史の意味を含めた語になったというのである。この説明は確かに語源論的 Etymological な説明としては正しいが、今日のように一個の科学となつてゐる歴史学の的確な定義としては、きわめて不正確

な説明ではない。この英語の History に対して、ドイツ語では Geschichte と言ふ。この Geschichte になると、この語は元來、Geschehen という語——「生起する」という意味をもつ動詞が名詞化した語であるから、ドイツ語では歴史は、「生起した事実」という意味をもつ。そこでいまこの二つの語のもつ、それぞれの原義を合せると、やつと今日の歴史学の概念としていつそう明確になるが、それでも歴史学の定義としては不十分である。

先に述べたギリシア語 Historia にはそれ以外に、「事象の調査」・「學術の探究」・「事柄の調査などによって得た知識や経験」・「研究された物語」のような多様な意味があるが、それらのすべての意味を含めたところに歴史学という意味が派生し、普及したのだと思われる。この History・Geschichte の訳語として歴史・歴史学（略して史学）という日本語が成立したのであるが、この語は勿論中国古典語——漢語であることは言うまでもない。中国語としての「歴史」は、「歷代史学」の約語である。

漢語である「歴」はその象形文字などから推してみると、「麻」と「止」との合字であり、「麻」は「𦰩」すなわち崖、「林」は「木」と「木」とが並んで「林」となる。この下に「止」が加わるが、象形文字だとこれは歩いたあとの足形を意味するのであり、これを加えた「歴」は、「整然とした間隔をとって歩行する」という意味になり、それから、「経る」・「通過する」・「あまねく」そして「こよみ」などの義が派生するといわれる。

それに対して「史」という漢字は、やはり象形文字をみると、「中」と「又」の合字であることがわかる。

「中」は象形をみると、「丨」が投壺の矢を意味し、「口」は口を意味する。投壺の矢というのは、宴会の時に矢をとって投壺の中に投じて勝負を楽しむ礼である。その矢を数えるので算数の義となり、それに口が加わって、

口で数をよみかぞえることを意味し、数えることから読む意味が派生し、やがて文書の義が加わる。「中」の下に「又」が附加するが、「又」は右手の象形で、左手より優れた中国人の間で尊ばれる右手の義で、この合字である「史」は、右手に従い、中に従う会意文字で、天文の数を正しく計算し、誤りなくせよという意味であった。天文を計算するということは暦を作ることであり、それは中国では史官の本来の仕事であった。右手で暦数を算え、出納の計算書を作成する人が史官で、それから読み書きをする者から事を記述する官吏・書記官・祐筆を意味し、更に官司が記す記録・書籍を指すことから歴史の意義に固定するに至った。

日本では史をフミヒト・フビトと訓んで、史官を指していた。かくして歴史といってもすべて史の方に重い意味が宿されるようになったのである。

以上の如く歴史とは生起した事実に関する知識やその記録・物語を意味することは明らかにされた。しかしまだここでは生起した事実領域に関する特定がない。したがってこの意味を最大限に拡大解釈をするならば、単に民族や国家に関する諸々の事件にとどまらず、植物界・動物界に生起した事実でも、地質や宇宙間に生起した事実についても、それを物語として記述すれば歴史の部類に入れて差支えがないことになり、歴史学の範囲が、当然植物史・動物史・地史・天体史のごときものさえ、共に歴史の中に含めてよいことになる。そうすると、H. G. Wells が著した、“*Outline of History*”にみられるような、宇宙の開闢より筆を起すという歴史叙述の方法も肯定される結果になる。しかし今日歴史学が一個の科学としての歴史学 History as a Science として認められる時、われわれは決して自然界に生起した事実をその内に含ませてはいない。ここでは生起した事実といってもそれはより狭く限定された領域での意味で使用する。歴史学にあつては生起した事実の領域を、排他的にヒトに

関連した事実と限定しているのである。

(二) 歴史学におけるヒトの概念

歴史学が取り扱う事実はもっぱらヒトにまつわる出来事であるとするが、ではそのヒトとは何か。生物の成員としてのヒト *Homo sapiens L.* は、生物分類学 Taxonomy の上からみると、脊椎動物門 *Vertebrata*、哺乳綱 *Mammalia*、真獣亜綱 *Eutheria*、有胎盤部 *Monodelphia*、霊長目 *Primates*、猿亜目 *Simiæ* *Anthropoidea*、狭鼻類 *Catarrhyna*、人科 *Hominidae*、人属 *Homo* という、分類上の位置を占めるのである。それでヒトに関する研究は、純正自然科学である生物学 *Biology* の領域に所属されるのである。こうした生物学の中のヒトの研究もまた、その分科としての人類学 *Physical Anthropology* や、人種学 *Raciology* の中で研究されるわけである。そこで歴史学の研究領域はこの生物学、またその分科としての人類学・人種学の研究領域の一部、あるいは全体と互いに抵触する結果となる。そこで歴史家は、その研究を完全に果すためには当然このような自然科学の研究領域にまで立ち入らなければならないことになろう。

けれども、歴史学はヒトを対象とするというが、その意味は、人類学や人種学などの自然科学が、ヒトを一個の自然界に生息する動物の一員として他の動物群と同列に取り扱うのに対して、他の人文科学の場合と同じく、自然界に生息する生物の一員としてのヒトではなく、社会的動物 *Animal Sociæ* としてのヒトを対象とするのである。その意味は、すでに西暦紀元前第四世紀のころ、ギリシアの哲学者アリストテレス *Aristoteles* (384-322B.C.) が「人間はポリスの動物である」・「人間は秩序ある団体生活を営む運命に定められた生活体である」といみ

じくも喝破してゐるように、自然の中で生活を営む間に、その威力の前に調和順応したり、人智をもつてそれがある程度克服したりして、そこにヒト特有の生活環境を築きあげつつ生活を営んできた、そのヒト特有な社会と、その社会の成員としてのヒトの社会生活—文化とに關連して、その間に生起したさまざまな事実を専ら研究の対象とするものなのである。

それ故に歴史学にあつては、自然科学としての生物学・人類学・人種学などと親縁關係をもつよりも、ヒトの社会とか、ヒトの文化とかを研究の対象とすることに要点をおくので、社会科学としての社会学 Sociology や、文化科学としての民族学 Ethnology (文化人類学 Cultural Anthropology) などと、いつそう深い親縁關係をもつのである。それ故歴史学は一個の科学としては、自然科学としてではなく、あくまでも社会科学ないし文化科学であるといわれるのもつばらこうした点においてである。

(三) 歴史学と時間領域

生物の一員としてのヒトは、本能的に群棲生活 Gregarious Animals Life を営む動物であるから、ヒトの集團生活の起源はきわめて古い。そこで歴史学で取り扱う時間領域はいかなる時代を扱うかの問題を考えなければならぬ。時間的過程を一般的に過去・現在・未来に三大別すると、その中で歴史学が取り扱うのはすべての過去の時間領域に限定されるといえる。

時の流れは永劫にわたつて連続して、絶えることを知らない。一線連続的なこの時の流れを前の如く三大別するのは、人間の便宜的・恣意的な区分に過ぎない。これによつて時間を一定のケースに入れて、不連続的・固定

的に区分することは不可能である。われわれの直面している現在は、計り知れない遠い昔から集積されてきた過去の総和の上に定置されたものに他ならない。その現在は次の瞬間には早くも過去の領域に化してしまふ。一瞬間も留まることのない刹那的現在に他ならない。現在とは、常にその背後に偉大な過去の集積物を荷なつて、不斷に未来の領域に向かつて驀進しつづけていく。故に未来の領域は絶えず現在の接近によつて侵蝕され、未来の領域が現在の一点に接触した次の瞬間において直ちに過去の領域に没入してしまふ。その未来という時間領域は、現在に立つて不斷に未来に向かつて時と共に驀進しつづけるヒトにとっては、全く予想を許されない未知の領域であるから、未来の領域における事実などということは、とうていあり得ないことである。それ故に未来という時間領域は歴史学の研究領域には入らないのである。また時の流れの不斷の流動過程において、現在の一点において生起した諸々の事実は、それが必ずその背後に密着している過去の領域において、必然的に生起すべき原因をもつていたが故に生起せざるを得なかつた事実にはかならない。かつそれは次の瞬間において現在となるべき未知の未来の領域に対し、なんらかの結果を生ぜしめるのである。そうみるとこの事実は歴史性をもつ事実であるから、それを歴史の叙述に加えることは当然であると思われよう。しかし厳密にみると、現在の領域において生起したすべての歴史事実を正確に認識した上で、それを公正に記述することは、前に述べた現在という時間領域の概念の本質に照らしてみるなら、ほとんどそうする時間的余裕をもち得ないために、それは全く不可能なこととするほかはない。現在において生起した事実は、いかに速やかに記述したとしても、それを記述した時すでに生起した事実そのものは、早くも過去の領域に没入してしまつているのである。

こう観察してみると、史実の叙述は常に現在進行形時制 Present Progressive Tense をもつて記述することは勿